

(1)

問一	㊦	減少	㊧	推定	㊨	含む	㊩	俊敏	㊪	発揮
問二	混沌とした情報の中で、現在から将来への変化の法則を掴み、積極的な活動によって自己の状態を変化させていくこと。									
問三	日本は行動目標がはじめから与えられている画一的なフィードバック社会であり、目先の大きな目標への適応が速く、組織的に行われる。一方、欧米はフィードフォワード型社会で、遠い将来における目標の設定、長期的な自己の行動規範の表明が必要とされ実行される。									
問四	自分と周りの人々の創造的な発想を引用・伝達することで、環境から入ってくる混沌とした情報の中に法則性を見出し、未来に創造的に対応していく新しい意味論的な情報を創造していくこと。									
問五	私たちが今見ている環境には、意味的狀態が規定できない不確かさがあり、対象と自己との間の情報的な境界が曖昧である、各人の意味論的な背景から導き出されたものだということ。									

(2)

問一	㊦	こうさく	㊧	とくしん	㊨	がぜん	㊩	おうとう	㊪	のき
問二	私も妻も借家捜しのために一日中歩き廻って、二人とも疲れ果ててしまい、その疲れを一刻も早く癒したいたために、判断力を欠いたまま、欠陥があることに気付かず、早計に家を選んでしまった。									
問三	私はふと、私のぼんやりしたその空虚な心のなから、急に、かうしてゐてもはじまらない、今日中に家を見つけなければ、と思ふあわただしい気持ち、泡のやうにぼつかりと浮き上つて来た。									
問四	今の家に住む契機となった丘の草の根が踏みつけられても、一年後にはしっかりと芽吹いていることに、生命力や運命の循環が想起されたから。									
問五	季節が巡る度に美しい花々を咲かせる自然の生命力の豊かさが、家の内側の暗さの象徴として病を患っている妻と対比されて際立ち、尚一層、実感として印象付けられたから。									

(3)

問一	霞が峰を越え、笈をつたうように谷間をわたる様子を描いて、季節が春へ変化していることを表現している。
問二	「らむ」は現在推量の助動詞で、逢坂山が霞んでいるのは、遅ればせながら春が山を越えて訪れているからだろうかあとと推量する働き。
問三	徐々に春になっていく様子を、霞が立ちこめる景色を見て実感しているという和歌の趣向。
問四	左の歌の表現の仕方は、よい歌にも多く見られるものだが、右の歌は言葉になめらかな流れがあるので、左の歌よりもまさっている。
問五	擬人法

(4)

問一	たとえ鄭を攻めに行っても成功することはないだろうということ。
問二	父を亡くした自分を侮って喪中に晋領有の滑に攻め込むのは、たいそう礼に反するから。
問三	<p>㉔ 父を亡くした孤児ということ。</p> <p>㉕ 諸侯の一人称で、私ということ。</p>
問四	<p>(1) 願はくは此の三人をして歸らしめ、我が君をして自ら快く之を烹るを得しめよ。</p> <p>(2) どうかこの三將軍を秦に帰らせて、私の父である秦の繆公に、自分で思う存分この三人を煮殺すことができるようにさせてください。</p>
問五	百里傒や蹇叔の助言を用いず鄭を攻めさせたために三人が辱めを受けることになったのだから、三人には何の罪もなく、自分の責任であると考えた。